

## 特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒の自尊感情と 他者意識・他者との関係性に関する実態調査

李 受眞\*<sup>1</sup>・橋本 創一\*<sup>2</sup>・尾高 邦生\*<sup>3</sup>・林 安紀子\*<sup>2</sup>・小林 正幸\*<sup>2</sup>  
枅 千晶\*<sup>1</sup>・杉岡 千宏\*<sup>1</sup>・山口 遼\*<sup>4</sup>・熊谷 亮\*<sup>5</sup>

教育実践研究支援センター

(2018年9月21日受理)

### 1. 問題と目的

自尊感情は包括的、記述的概念の評価的側面かつ感情的側面を表しており、自己概念の一部と考えられる。そして「自分の否定的な面を受容するとともに、自分を他者との関わりを通してのかけがえのない存在としてとらえる気持ち」である(園田, 2007<sup>1)</sup>; 東京都教職員研修センター, 2009<sup>2)</sup>)。平成21年に告示されたキャリア教育の始まりとともに、日本では他国に比べ自尊感情の低さを指摘しながら、教育課程に自己の重要性がさらに強調された。

知的障害のある人の自己概念の形成は、知的障害のある人に対する生きる力の教育上も無視されてはならないとその重要性について様々な論文で述べられている(大山・今野, 2002<sup>3)</sup>; 原・内海・緒方, 2002<sup>4)</sup>; 小島, 2007<sup>5)</sup>)。さらに、自己概念は人が自分の能力や身体的特徴など諸特性に対してもつ態度、感情や価値観などの総称であり、それは、自己の行動とその結果の自己知覚によって形成されると考えられている(大谷・小川, 1996)<sup>6)</sup>。一方で、自己概念の形成には、本人の視点と同様に他者の視点が存在することが指摘されている(Bracken, 1996)<sup>7)</sup>。さらに、小島(2010)<sup>8)</sup>によると、他者のことをより強く意識している対象児ほど、自己についてより語る事ができる。

今までの多くの研究では、自尊感情と他者との関係

について重要だと指摘されてきた。しかし、これらの研究は知的障害児者の自尊感情の低さに関する指摘にとどまり、教師が実際知的障害のある生徒の自尊感情をどのような側面から捉えているのか、またその生徒の具体的に重要な他者と他者への態度やコミュニケーション、保護者との愛着関係については明らかにされていない。このことを明らかにすることは、自尊感情に関する支援を行う上で、基礎的かつ有効な知見になると考えられる。そこで、本研究では、まずは知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害のある生徒を担当する教師が、その生徒の自尊感情と他者との関係性についてどのように捉えているかについて明らかにすることにした。

### 2. 方法

#### 2.1 調査方法・対象者

対象者は、全国にある知的障害特別支援学校高等部714校に送付し、返送があった356校(回収率50%)の担任教諭356名であった。

#### 2.2 調査内容

##### (1) 調査対象者のプロフィール

回答者の教員経験年数、担任または担当している学級の生徒数、その内の軽度知的障害の生徒数について

\*1 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科

\*2 東京学芸大学 教育実践研究支援センター

\*3 筑波大学附属大塚特別支援学校

\*4 東京学芸大学大学院 教育学研究科

\*5 福岡教育大学

回答を求めた。

## (2) 抽出された特定生徒に関するプロフィール

現在担当している、または過去に担当した軽度知的障害のある高等部生徒を1人とりあげてもらい、特定生徒に関する性別、障害種についての質問に回答を求めた。

## (3) 自尊感情の質問項目 (9項目)

小島・納富 (2013)<sup>9)</sup> が Rosenberg (1965)<sup>10)</sup> の尺度を日本語訳した山本・松井・山成 (1982)<sup>11)</sup> の項目を参考に小学校4年生から6年生でも回答できるように、また否定的な表現をなるべく肯定的な表現へと一部修正を行った計9項目からなる尺度である。質問項目の中、「もっと好きになりたい」という項目のみ除いた。具体的な教示内容は、表1に示す。この自尊感情の質問項目を用い、教師から推測して、特定の生徒が自分自身について質問項目でどのように思っているかを①よくあてはまる、②少しあてはまる、③あてはまらない、④わからないの中で、当てはまるものを選んでもらった。

表1. 自尊感情に関する質問項目

- |                       |
|-----------------------|
| 1. 自分のことが好きだ          |
| 2. 自分にはいいところがたくさんある   |
| 3. 自分は大切な人間だ          |
| 4. 他の人と同じくらい色々なことをやれる |
| 5. 自分には自慢できることがたくさんある |
| 6. 何をやってもうまくできない      |
| 7. いまの自分でいいと思う        |
| 8. 自分はダメな人間だと思う       |
| 9. 自分は役に立つ人間だと思う      |

## (4) 重要な他者への理解と具体的に重要な他者

生徒の自分にとって重要な他者を「理解している・知っている」、「無理解・知らなかった」の当てはまるものを選んでもらい、具体的に重要な他者について自由記述で回答を求めた。

## (5) 他者に対する態度・コミュニケーション

生徒の他者に対する態度やコミュニケーションについて①から⑦まで当てはまるものを選んで回答してもらった (①対等な態度、②威圧的な態度、③内気な態度、③無関心な態度、④協力的な態度、⑤親切な態度、⑥指示をする側に立つ態度、⑦指示される側に立つ態度)。

## (6) 保護者との愛着関係

保護者との愛着関係について、当てはまるものを選んで回答してもらった (①とても近い、②やや近い、③普通 (近くても遠くてもない)、④やや遠い、⑤とても遠い)。

## 2. 3 分析方法

選択式質問項目の回答については、単純集計をし、割合を算出した。具体的に重要な他者に対する自由記述式質問項目の回答については、KHコーダーを用いてカテゴリー分けを行った。

## 2. 4 倫理的配慮について

本研究への協力と発表において、調査の依頼文において得られた情報は研究の目的以外で使用しないこと、個人・学校が特定されないよう配慮することを明記した。調査用紙の回収を持って調査への同意が得られた者とした。個人情報に十分留意し、倫理的配慮を行った。なお、東京学芸大学倫理委員会 (申請番号248) において承認された上で実施した。

## 3. 結果

### 3. 1 調査対象者のプロフィール

回答者の平均教員経験年数は16.7年 (SD = 9.4) であった。担任または担当している学級の平均生徒数は、11.8名 (SD = 18.2) であった。そのうち、軽度知的障害の生徒数の平均は7.5名 (SD = 10.4) であった。

### 3. 2 抽出された特定生徒に関するプロフィール

生徒の性別は男子260名、女子95名であった。生徒の障害種については、自閉症の合併する者〔以下、+ ASD者〕76名 (21.5%)、ADHDの合併する者〔以下、+ ADHD者〕63名 (17.8%)、知的発達障害のみの者〔以下、IDD者〕146名 (41.2%)、その他の者69名 (19.5%) であった。

### 3. 3 自尊感情の質問項目 (9項目)

項目に「不明」という回答が1つでもつけられた場合、欠損値 (N = 134) として扱い、222名を対象にした。教師が回答した特定の生徒の自尊感情の平均得点は8点 (SD = 3.59) であった。得点の程度から3つ (高・中・低) に分けた結果、得点が高い生徒は37名 (16.7%)、中程度の生徒は135名 (60.8%)、低い生徒は50名 (22.5%) という分布になった。欠損値の中でも「不明」 (N = 128) という回答が多かった項目

は、「自分は大切な人間だと思っている」(54名: 42.2%), 「自分は役に立つ人間だと思っている」(50名: 39.1%), 「今の自分でもいいと思っている」(39名: 30.5%) で、自分に対して肯定的な感情を聞く質問項目であった。

### 3. 4 重要な他者の理解と具体的に重要な他者(自由記述)

生徒が自分にとって重要な他者を理解していると答えた教員は283名(81%), 知らないと答えた人は49名(14%), その他17名(5%)であった(図1)。重要な他者(N=283)は「担任」が141名(50%), 「母親」が128名(45%), 「担任以外の教師」が70名(25%), 「友人・友達・同級生」が44名(16%), 「家族」が25名(9%), 「父親」が21名(7%), 「祖母」が15名(5%), 「兄弟」が7名(2%), 「恋人」が6名(2%), 「先輩」が5名(2%), 「養護教諭」が5名(2%), 「祖父」が2名(1%), 「カウンセラー」が2名(1%)であった(表2)。

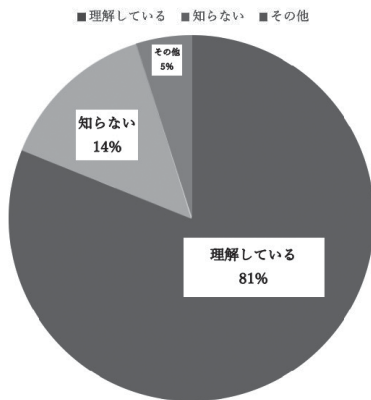


図1. 生徒が自分にとって重要な他者を理解していると答えた教員

表2. 生徒の具体的に重要な他者について(複数回答可)

重要な他者	人数(名)	割合(%)
担任教師	141	50
母親	128	45
担任以外の教師	70	25
友人・友達・同級生	44	16
家族	25	9
父親	21	7
祖母	15	5
兄弟	7	2
恋人	6	2
先輩	5	2
養護教諭	5	2
祖父	2	1
カウンセラー	2	1

### 3. 5 他者に対する態度・コミュニケーションと保護者との愛着関係

生徒が他者に対しどのような態度やコミュニケーションをとっているのかについて一番多かった回答は、「親切的な態度(145名: 41%)」であった。「対等な態度(123名: 35%)」「協力的な態度(123名: 35%)」「指示する側に立つ態度(117名: 33%)」「威圧的な態度(115名: 32%)」「内気な態度(82名: 23%)」「無関心な態度(70名: 20%)」「指示をされる側に立つ態度(47名: 13%)」「その他(44名: 12%)」の順で多かった。

保護者との愛着関係(心理的な距離)について, ①近い(105名), ③遠い(97名), ②普通(80名)の順に多かった。保護者との愛着関係は近い生徒が多く見られた。

保護者との愛着関係が近い生徒は他者に対し「親切的な態度(62名: 59%)」「対等な態度(61名: 58.1%)」「協力的な態度(54名: 51.4%)」が多く見られた。保護者との愛着関係が普通である生徒は、「親切的な態度(37名: 46.3%)」「協力的な態度(30名: 37.5%)」といったコミュニケーションをとることがわかった。一方で, 保護者との愛着関係が遠い生徒は他者に対し、「親切的な態度(40名: 44.4%)」「威圧的な態度(36名: 40%)」「指示をする側に立つ態度(34名: 37.8%)」が多く見られた(図2)。

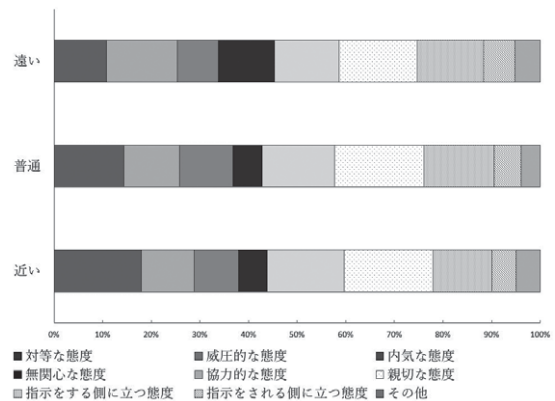


図2. 生徒の保護者との愛着関係と他者に対する態度・コミュニケーション

## 4. 考察

本調査は, 全国の知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害のある生徒の自尊感情と他者との関係について, 教師の捉え方について調査した。その結果, 全国の知的障害特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害のある生徒の自尊感情の実態や重要な他者に関す

る実態の現況が明らかになった。

回答する教師によって無作為に抽出された軽度知的障害のある生徒の自尊感情の得点から自尊感情の低い生徒に偏りがあることがわかった。教師が生徒の自尊感情を見計らう際に、生徒の自己に対する肯定的な側面について気づくことが困難である点から普段の学習場面や学校生活の中でそのような手がかりが少ないことが考えられた。

教師の回答により、重要な他者を理解しているような生徒がほとんどであることがわかった。具体的に重要な他者の場合、担任や父母を含んだ家族という回答が多いことから身近な他者が多いことが明らかになった。一方で、「友人・友達・同級生」といった同年齢の集団より大人との関係が密であり、移行期である青年期において青年期知的障害者の特徴であると考えられる。

保護者との愛着関係が「近い生徒」, 「普通である生徒」, 「遠い生徒」のそれぞれの共通している他者への態度・コミュニケーションは「親切的な態度」であることがわかった。知的障害生徒は他者に対し親切的な態度で接していく中で望ましい結果が得られた経験が多かったかもしれない。一方で、保護者との愛着関係が近い生徒は他者に対して良好で安定したコミュニケーションをとっている反面、愛着関係が遠い生徒は、親切的ながらも威圧的な態度を示していることがわかった。

本研究の課題として、特別支援学校高等部の教師に対する質問紙であるため、一方的な判断であったことが挙げられる。特に、軽度知的障害のある生徒の自尊感情を測定する難しさがある中で、教師の実績や過去の経験から得られた知見に基づく判断や見立てである可能性も考えられる。しかし、キャリア教育の展開にとって最も重要視される特別支援学校高等部において、平均16.7年の教員経験年数の中堅教師の回答による、そこに在籍する軽度知的障害のある生徒の自尊感情への判断とその支援に関する現況は率直に注視すべき価値があると考えられる。そして、今後の知的障害のある生徒の自尊感情の理解・把握や他者との関係性において有益な知見が得られたと言える。その一方で、自尊感情における重要な他者への認識の違いや関わり方については明らかにできていない。今後は、自尊感情の高低やタイプに応じて、実践事例などを通して検討する必要があるだろう。

## 引用文献

- 1) 園田雅代 (2007). 今の子どもたちは自分に誇りをもっているか—国際比較調査から見る日本の子どもの自尊感情 (特集 自尊感情を育てる) 児童心理, 61, 874-883.
- 2) 東京都教職研修センター (2009). 自尊感情や自己肯定感に関する研究—幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方—. 東京都教職研修センター紀要, 8, 3-26.
- 3) 大山美香・今野和夫 (2002). 知的障害児者の自己概念に関する研究知見と実践的課題—文献的考察を中心に— 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 24, 53-66.
- 4) 原智彦・内海淳・緒方直彦 (2002). 転換期の進路指導と肯定的な自己理解の支援—進路学習と個別移行支援計画を中心に—. 発達障害研究, 24, 262-271.
- 5) 小島道生 (2007). 知的障害児の自己の発達と教育・支援 田中道治・都筑学・別府哲・小島道生 (編) 発達障害のある子どもの自己を育てる—内面世界の成長を支える教育支援—. ナカニシヤ出版, 12-27.
- 6) 大谷博俊・小川巖 (1996). 精神遅滞児の自己概念に関する研究—自己能力評価・社会的受容感と生活年齢・精神年齢との関連性の検討—. 特殊教育学研究, 34, 11-19.
- 7) Bracken, B. A. (1996). Clinical applications of a context-dependent, multidimensional model of self-concept. In B. A. Bracken(Ed.), Handbook of self-concept. John Wiley, New York, 453-503.
- 8) 小島道生 (2010). 知的障害児の自己概念とその影響要因に関する研究—自己叙述と選択式測定法による検討— 特殊教育学研究, 48, 1-11.
- 9) 小島道生・納富恵子 (2013). 高機能広汎性発達障害児の自尊感情, 自己評価, ソーシャルサポートに関する研究—通常学級に在籍する小学4年生から6年生の男児について— LD研究, 22, 324-334.
- 10) Rosenberg, M. (1965). Society and The Adolescent Self-image. Princeton University Press.
- 11) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒の自尊感情と  
他者意識・他者との関係性に関する実態調査

Self-esteem and human relations of students with mild intellectual disabilities  
in special needs classes of Japanese high schools

李 受眞\*<sup>1</sup>・橋本 創一\*<sup>2</sup>・尾高 邦生\*<sup>3</sup>・林 安紀子\*<sup>2</sup>・小林 正幸\*<sup>2</sup>  
枘 千晶\*<sup>1</sup>・杉岡 千宏\*<sup>1</sup>・山口 遼\*<sup>4</sup>・熊谷 亮\*<sup>5</sup>

Sujin LEE, Soichi HASHIMOTO, Kunio ODAKA, Akiko HAYASHI, Masayuki KOBAYASHI,  
Chiaki MASU, Chihiro SUGIOKA, Ryo YAMAGUCHI and Ryo KUMAGAI

教育実践研究支援センター

Abstract

Self-esteem and relationships with important others of students with mild intellectual disabilities enrolled in special needs classes of Japanese high schools were investigated. The perspectives and judgments of participating teachers (N=356) working in such schools were examined. The results indicated that students judged as having low self-esteem might have been selected by chance. On the other hand, teachers had only a few clues for judging the self-esteem of students with mild intellectual disabilities. Most of the teachers responded that such students could understand important others. Moreover, students' methods of communicating with others in attachment relationships with their parents were slightly different. The above results provide useful data for understanding the self-esteem and communication with important others in students with intellectual disabilities. On the other hand, differences in recognizing important others based on self-esteem and methods of interacting were not identified by this study. It is suggested that practical cases should be examined in the future, depending on the level and type of self-esteem.

Keywords: Special Needs School, Mild Intellectual Disabilities, Self-esteem, Important others, Communication, Attachment Relationship

*Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

---

\*1 Doctoral Course The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University  
\*2 Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University  
\*3 Special Needs Education School for the Mentally Challenged, University of Tsukuba  
\*4 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University  
\*5 University of Teacher Education Fukuoka

**要旨：** 全国の知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒の自尊感情と他者意識・他者との関係性について、教師356名を対象に捉え方と判断について調査した。その結果、全国の知的障害特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害のある生徒の自尊感情の実態や重要な他者に関する実態が明らかになった。自尊感情が低いと判断された生徒が偶然に抽出された可能性がある一方で、回答した教師らは担当・担任する軽度知的障害のある生徒の自尊感情を見立てるための手がかりが少ないのではないかと推測された。また、ほとんどの教師が軽度知的障害のある生徒は重要な他者を理解していると答えた。さらに、保護者との愛着関係における生徒の他者へのコミュニケーションの仕方は少し違いが見られた。今後の知的障害のある生徒の自尊感情の把握や重要な他者、他者とのコミュニケーションにおいて有益な知見が得られたと言える一方で、自尊感情における重要な他者への認識の違いや関わり方については明らかにできていない。今後は、自尊感情の高低やタイプに応じて、実践事例などを通して検討する必要があるだろう。

**キーワード：** 特別支援学校高等部，軽度知的障害生徒，自尊感情，重要な他者，コミュニケーション，愛着